

研究ノート

文芸ノート・モリス・ヴァイツの方法（その二）

今 村 温 之

文芸研究を単なる情緒的鑑賞という完全な主観性に陥らしめる事を峻厳に拒否するなら、常に我々は文芸学の方法論に対する努力を怠ってはならない。研究者が各々の armed vision の鋭利を競う理由でもある。

後期ヴィツチェンシュタイン Wittgenstein の思想が文芸理論に影響を与え始めたのはそう新たなことではない。しかし文芸研究者が彼の影響を無視できなくなったのは、今を遡る十年前にモリス・ヴァイツ Morris Weitz が『ハムレットと文芸批評の哲学』*Hamlet and the Philosophy of Literary Criticism* (Cleveland and New York, 1966) を刊行して以来のことである。その理由は、ヴァイツが文芸批評の交差点ともいえるべき『ハムレット』に対する実際の諸批評より極めて経験的態度で

批評上の諸問題を抽出し、これらにヴィツチェンシュタイン流の言語理論を宛用したという点にある。この書物の存在を私が知ったのは今から五年も前であるが、ある事情から読み残しにしていた。この書の正確な理解を今渴望するのは広義の文芸研究のレベルを確認したい為である。従って文芸学の自律的領域にヴァイツの方法を組み込む作業は後に回したい。

紙面の都合で後期ヴィツチェンシュタインの思想をこの文芸研究ノートの必要に応じた範囲で扱うことが出来なかった。しかしあらゆる危険を冒しつつヴァイツの出発点を極めて簡単に述べるならば次のようになる。

『ハムレット』批評（ヴァイツはこれが総ての文芸批評のモデル・ケースである事を要請している）に携わる多くの批評家

達は言語に対して古典的概念を抱いている。彼等によると言語は個々の単語と文章における単語の組み合わせからなっており、各単語は単に形や音でなく語であるかぎり、ある実体の名辞となつてゐるのである。単語の意味とはその単語の表わす実体であり、従つて意味とは言語とリアリティの間の関係があつて存在する事実である。だから単語の意味を問ひ述べることは単語が指示するものを問ひ述べることである。総ての名詞、固有名詞、形容詞、動詞は事物、人々、質、属性、行動、観念の名辞として解釈されるのである。そして名辞の組み合わせである文章は世界の実体に関する真（偽）の叙述を主として行うのである。そこでもし我々が思考し書き話している実体の本質を我々が知らないとするなら、又我々がその知識に真で実なる定義を与えることが出来ないとするなら、理解可能で正しい思考とか表現は存在しえないのである。しかし近年の言語哲学、殊に後期ウィッチェンシュタインの言語哲学はこのような古典理論に對峙するものである。言語は単語とそれらの組み合わせよりなつてはゐる。が、総ての単語は名辞としてのみ機能しているとは限らないのである。言語とは世界に對應する鏡のようなものでなく、多様にとり合わされた道具が詰まつている巨大な

道具箱のようなものであり、如何なる言語もそれが宛用される世界の事物に似てはいない——シャベルが掘る穴に似てはいないように——のである。我々が単語を使用する際のコンテクストにおいてのみ、あるものは名辞として用いられ、他のものは記述や類別として用いられ更に他のものは帰因したり規定したり感情を示したり説得したり等するために用いられるのである。文章も亦実に様々に使用しているのであり単に真又は偽の叙述を行うのではないし、更に実証主義者達が言っているように感情を示したり説得したりのみするとは限らないのである。意味も亦対象指示ではなく、少くとも「Xという表現の意味」という第一義的なみにおいては、表現の使用を規制する法則、規則、そして慣習として再解釈されるのである。従つてある表現の意味を理解することは、それが表わす対象に精通することではなく、それを正しく使用するための基準を宛用できることなのである。しかるに『ハムレット』批評における根本的な想定とは、言語は論理的にみて単義的であるという想定、即ち言語に関する手順、論証、問題の多様性は実は一連の同様に機能する語に関するものであり一連の同様の言語の使用法に関するものであり事実の真偽の叙述に関するものであるという想定なので

ある。『ハムレット』の諸問題は劇の難しさから生じるのではなく言語の機能に関する批評家自身の伝統的作業仮説から生じるというのがヴァイツの出発点なのである。彼は批評言語の機能を記述(的)、説明(的)、価値評価(的)、理論構成(的)の四つに分類し『ハムレット』批評の言語的諸問題を説明していくことになる。又彼が文芸批評言語の實際を考察する為に特に『ハムレット』批評を選んだ理由は、それが総ての文芸批評のモデル・ケースでありそこに文芸批評上のあらゆる言語的諸問題が集約されているとの確信に基づいているのである。

一、記述(的) (Description)

批評の出発の基礎となるものは何であろうか。例えば『ハムレット』における所与とは何であろうか。この劇に関して批評が叙述することが出来る何がこの劇に与えられているのだろうか。仮令総ての場合でないにせよ、作品の諸構成要素においては種々の登場人物、彼等の特色、会話、行動、それに対話、独白、韻律形式、散文、言語、更にプロットとその個々のエピソードといったものは区分しうるのである。これらは作品に与え

られたものであり何人も否定しえない。ブラドリーはある時には説明(explanation)と共に、又ある時には説明を伴わずにこれらの記述を行うが、どちらの場合も彼の記述は論理的に彼の説明より独立している。ハムレットは逡巡しているというブラドリーの主張の真偽はハムレットはメランコリーだから逡巡しているのだというブラドリーの説明の(本人がそのつもり)真(偽)に依存しないのである。我々は、メランコリーはハムレットと切り離すことのできない特徴であるとか、自己正当化(殊に祈りの場面でハムレットが王の命を奪わなかったり、彼が先王の亡霊を疑ったりするとき)が彼の特徴であるというブラドリーの説明を問題とすることが出来る。しかし我々はブラドリーが記述しているハムレットのふさぎ、隠しだてのなご、父に対する敬慕の情といったものを問題に出来ない。如何に我々が『ハムレット』を説明しようと、否定しえぬ所与が存在するのだ。例えばハムレットはスポーツ好きであるとか、恐れを知らぬとか、傷つきやすいとか、逡巡しているとか、父を敬愛しているとか、ふさぎこんでいるとか、それらと同時に残忍で冷酷で猥褻であるとか、皮肉屋でしゃれが好きで同じ言葉をくり返す癖があるとかといった**事実**である。これらの事実をどのよ

うに構成してみてもどの事実もハムレットの人格の一面であることを否定出来ないし、これらの事実の一つを特に強調した如何なるハムレットの説明も他の事実の存在を否定出来ないのである。一見退屈に思える所与の記述は瑣末ではなく重要である。というのは所与の記述は諸要素の面又は質を、例えばハムレット自身の多くの面又は質を指摘し、劇に対する我々の理解が危機に瀕したときに我々の見逃しているものに注意を喚起するからである。幾個かの事実を数え上げることが基礎的であり瑣末ではない。何故なら説明と価値評価 (evaluation) とは記述に依存してくるからである。『ハムレット』の構成要素の誤った記述はその記述に基づく説明と価値評価とを危くする。「何故それが『ハムレット』に存在するのか」とか「どのような我々は『ハムレット』におけるその役割を最もうまく説明できるのか」とかいった形と区別した形で「何が『ハムレット』に存在するのか」を述べることは批評の重要な課題の一つである。登場人物の行動に関する説明の部分となつてはいるがブラドリーの記述は彼等の特徴の真(偽)の叙述として機能しており、我々に劇の中に彼等の何が与えられているかを教えてくれる。ファーストン、ストール、スパージョン、クレイメン、

スペンサー、コールリッジ等も事実を説明したり、作品を価値評価したりしているが、それらの叙述の中にも事実に関する記述が存在していると言えよう。

さて登場人物、プロット、言語等以外にも記述は可能であろうか。シェイクスピアの『ハムレット』の材源、それがテキストという姿をとってくる上での、その演劇史上の、その劇場史上の、その思想史上の材源、我々がその出発点と呼ぶもの、そしてシェイクスピアの『ハムレット』自体の正本といったものに関する叙述の中に記述はあるのだろうか。シェイクスピアの真の『ハムレット』と第一、第二クウォートと第一フォーリオと失われたウル『ハムレット』と『スパニッシュ・トゥレディ』と他のエリザベス朝の諸劇との間の関係の叙述、シェイクスピアの聴衆に関する叙述、彼が利用した演劇上の仕掛けに関する叙述、人間、悲劇、激情、亡霊、政治に対するエリザベス朝思想に関する叙述、シェイクスピアの真の『ハムレット』の正本に関する叙述といったものの中に記述は存在するであろうか。こういった叙述は各々の学者が主として『ハムレット』と其のある面とを説明する目的で行っているのである。しかし我々の関心は当面の間、歴史的資料の使用法にあるのではなく、

これら歴史的説明的批評の中に記述的批評の部分があるのかないのにかにある。私（ヴァイツ）には『ハムレット』の正本に関する叙述とか、その思想史上の、そして演劇史上の叙述とかいったものの多くは記述をも、即ち『ハムレット』の内と周辺の様々な事項に関する真偽の叙述をも含んでいるように思える。

例えばスペンサーはこの劇を説明する際に楽観論と悲観論という二組の説を詳述している。これら二説はエリザベス朝に広く普及しており、シェイクスピアはこれら二説を『ハムレット』において劇化したのであると彼は述べている。更に彼はこれら二説がシェイクスピアの時代に対峙しておりかつこの葛藤が一般的であったと主張している。我々は彼の小綺麗なエリザベス朝世界観と彼のハムレットに対する説明とを問題とすることが出来る。しかし我々は彼の批評の中の、正統キリスト教神学とこれに対立する学説とによって主張されている人間ならびに世界における人間の位置に関する種々の哲学的主張に関する詳細な叙述（記述）を問題とすることは出来ないのである。スペンサーはここで二組の説に対して真（偽）の叙述を行っているのである。彼はエリザベス朝で広く読まれていたルネサンス

の諸著作から自論の確証上の証拠を得てきているのだから、歴史的説述という彼の意図に従って解釈されたエリザベス朝の楽観論と悲観論に関する彼の批評的記述的報告は証拠だてうるのみでなく証拠だてられているのである。従って我々が彼の批評の如何なる部分に挑戦しようとも我々はなおかつ彼の批評からシェイクスピアの『ハムレット』の思想史的状况を知りうるのである。

リリー・キャンベルはエリザベス朝の体液理論、特にメラノコリーと焦げついたメラノコリーとの区別や、悲劇の機能に対するエリザベス朝の概念や悲しみにおける慰みの道德的役割に対するエリザベス朝の見解等に関する記述を行っている。彼女のエリザベス朝の思想に関する報告は真又は偽であり、証拠だてうるし、実際にはシェイクスピア『ハムレット』の周辺の状況における事項の真であり、証拠だてられた叙述である。

ウィルソンは亡霊や靈魂に関するエリザベス朝の見解を叙述している。マーセラスやホレイシヨやハムレットの亡霊に対する見方をエリザベス朝の心霊論の変種として説明する彼の叙述の本人がそのように思いこんでいる真（偽）とは全く独立して亡霊や靈魂に関するエリザベス朝の見解に関する彼の叙述は真

又は偽であり、証拠だてうるものであり、実際にはカトリックやプロテスタントや懐疑主義の諸学説への彼の言及により証拠だてられているのである。『ハムレット』批評家としての彼はエリザベス朝心霊論に関する重要な歴史的眞を述べているといえよう。

『ハムレット』批評における一つの大きな問題は、失われたウル『ハムレット』と『スパニッシュ・トゥレジディ』と第一、第二クウォートと第一フォーリオと『復讐せられた兄弟殺し』*Der bestrafte Brudermord* との間の関係を確定することにある。ロバートスン、ストール、シュキング、グレグ、チェンバーズ、アリス・ウォーカー、ダスィー、パウーズ、ウィルスン、V・K・ウィティカーといった批評家達は喪失版よりドイツ語版に至る迄の歴史の全部又は部分を説明しようとしてこれらの間の関係を記述し又これらのものの類似点と相違点とを説明している。このような関係には、即ち近世以降の劇の形をとりはじめたものからドイツ語版に至る歴史にはたった一組の客観的諸事実しか存在しないのである。従ってこのような関係に関する眞の記述というものもたった一つしかないのである。そしてこの記述は原則としては証拠だてうるが実際には証拠

だてることができないのである。何故なら確証上の十分な証拠というものが欠如しているからだ。『ハムレット』諸版の歴史と関係に対する記述批評と『ハムレット』の中のデータとその周辺のデータに対する記述批評とは、両者が客観的に存在する事項に関する眞又は偽の証拠だて可能な叙述であるという点において相似している。そして後者が実際に証拠だてうるのに反し、即ち現に眞として肯定されたり偽として否定されたりしているのに反し、前者は検証の爲の証拠不足の爲に原則としてしか証拠だてられず実際には眞偽を確定できないという点において両者は相異している。従って正本確定を目的とした『ハムレット』の歴史というものに関する眞偽の問題は解決可能ではあるが原則においてのみであり、現実には証拠不足のために不可能なのである。

『ハムレット』批評における記述の特質、多様性、機能といったものに対する以上の説明は『ハムレット』批評の記述的諸問題に宛用しうる。

先ず「ハムレットは気が狂っているか」という問題より検討することにする。ある種の批評家達はこの問題を「ハムレットは精神医学的に規定された狂気を満足しているか」というよう

にとつてしまっている。しかし医学上や法学上の狂気は我々が通常使用する日常的意味の狂気を再定義したものであり狂気の真の定義とはいえないのである。そこでこのような問題設定は避けねばならない。この問題は「ハムレットは狂気の日常的基準を満足しているか」ということである。ある者は総ての基準を満足するといひ他の者は全く満足してないと述べ更にそのあるものを満足していると言う者もある。この問題の解決が困難なのは、狂気の日常的基準が論理的に多様でありかつ正気（狂気を装っている場合も含め）の基準より明白かつ正確に区分されていらないという点にある。従つて我々の述べうる真の記述はハムレットは狂気の日常的基準のあるものを満たしてはいるが総てを満たしているわけではないということである。しかも我々は狂気の基準の論理的性質からして彼がどの程度狂気でありどの程度正気であるのかを述べることは出来ないのである。彼は完全な狂気でも完全な正気でもない。この漠然性 *vagueness*（どっちつかずの決め手のなさ）がこの問題に対する絶対の肯定と絶対の否定を妨げているのである。

次に「ハムレットはメランコリックであろうか」という問題を検討する。我々はメランコリーが多義的な語であることを知

らねばならない。即ち①体液的メランコリーというエリザベス朝の基準、②焦げついたメランコリーというエリザベス朝の基準、③塞ぎ、憂鬱、*taedium vitae*（タエディウム・ウィタイ・生に対する倦怠）という精神状態としてのメランコリーという現代的基準、の三者である。そこで批評家はこの問題を提出する際に自分が如何なる意味又は基準でこの語を用いているかを明確にしなければ明瞭な答を得られないのである。「①又は③の基準ではハムレットはメランコリックである」というのは記述的にみて真であり証拠だてられた答である。何故なら①と③は塞ぎという基準において共通しており、ハムレットの第二独白とローゼンクランツやギルデンスターンに対する冒頭の言葉（Ⅰ，２）は①と③を裏づけているからである。しかし「ハムレットは焦げついたメランコリーである」というのは記述的には真の答ではない。何故ならそれはエリザベス朝の医学上の説から出てきた仮説によるハムレットの行動の説明だからである。

「ハムレットは逡巡しているか」、「彼は自己を正当化しているのか、それとも斯いているのか」、「何故彼は逡巡するのか」、「彼は薄弱であろうか」。これらの諸問題を批評家達は

同種類の問題として扱っているが、実は異った種類の問題である。「ハムレットは逡巡しているか」という問題のみ記述的である。そしてこの問いに関しては劇中の証拠が圧倒的に多数である為明確に肯定しうるのである。但しストールは彼の逡巡を叙事詩的英雄主義と解釈しており、G・B・ハリスンは逡巡のノーマルな基準を変更し再定義を行っているのでこれらの場合は記述とは考えられないのである。他の残りの問題は総て説明的なものであり異類である。

『ハムレット』の中の“son”, “coil”, “nature”, “fishmonger”, “mitching mallecho”, “angel”, “action”といった語の意味に関する問題は如何に考えるべきだろうか。いくつかの非シェイクスピア的、エリザベス朝的(現存している)用法は我々に真(偽)の記述を提供しているといえる。いくつかのシェイクスピア的用法はそれらがエリザベス朝的用法に類似するか相違するかという点で真(偽)の叙述を我々に提供しているといえる。しかしこれらの語の注釈が『ハムレット』という作品の具体的特称的な詩的劇的コンテキストにおいて行われるとき、その注釈は事実においても原則においても証拠だてうるであろうか。こうしたコンテキストにおける語の注釈は読み方であり必然的に説明

的注釈的基準を伴うのであって、記述とはいえないのである。特定の語の用法は記述できるがその特称的劇的コンテキストにおける意味は各批評家の読み方によって解釈され説明されるにすぎないということは、『ハムレット』批評の具体的なコンテキストにおける語の注釈の総てにあてはまるのである。

「ハムレットとオフィーリアはお互いに愛しあっているのだろうか」という問題に対する答は真(偽)として記述できるであろうか。出来るはずである。何故なら彼等は互いに愛しているかないかのどちらからだからだ。しかし批評家の見解は異っている。原因は愛の意味ないし基準にあるのではない。彼等は互いに愛してもいないし憎んでもいないという漠然性 *vagueness* にあるのではない。原因は証拠自体にある。といっても証拠が少な過ぎるのではない。証拠の不明晰性 *unclearly* にあるのである。シェイクスピアの二人の愛情の劇化は明晰ではない。何故なら彼の劇化は愛のいくつかの基準を満たしているが、と同時に殊にハムレットの側での無関心の基準の満足があるからである。

「ガートルードは彼女の最初の夫の殺人を知っていたか」、「彼女は姦婦であろうか」。最初の問題に対する答には彼女が

知っていたという証拠は何もない。しかし知らなかったという決定的証拠も何もないのである。次の問題の姦婦 *adulteress* という語は多義的 *ambiguous* である。エリザベス朝の意味では答はイエスである。しかし王の生前から妃がクロードディアスの情婦であったのかという意味では批評家達は激しく見解を対立させている。これは証拠が明晰でない *unclear* 為に王の生前に彼女が忠実であったかなかったかは不明なのである。

「クロードディアスは篡奪者 *usurper* であろうか」、「彼は猫被り *hypocrite* であろうか」。これら二つの語のエリザベス朝における意味は我々のそれに略同じである。従ってこれらの問題は多義的 *ambiguous* でなく明確である。両者共に真で証拠だてられた答が提供されうる記述の問題であるといえよう。

二、説明(的) (Explanation)

『ハムレット』批評においては劇の説明が非常に多くみられる。諸批評家は『ハムレット』の真の解釈、正しい読み方、意味について語り、又『ハムレット』において何が中心であり、第一であり、最も重要であるかについて語っているが、やはり説明という同一の機能がそれらのものの公分母なのであ

る。この私のテーゼは幾人かの『ハムレット』批評家や批評哲学者のテーゼと矛盾する。彼等のテーゼに従えば劇芸術作品『ハムレット』の解釈 *interpretation* は論理的にその説明 *explanation* とは異なるのである。この問題の検討は後に回すとして、とにかく『ハムレット』のある部分又は全部に関する正しい読み方、解釈、意味、理解といった説述の外見上の多様性は論理上の又は機能的な多様性を意味するのではなく、説明という唯一の論理的機能を意味することをここで主張しておきたい。ではどのような説明が実際になされているのかを見ることにする。

例えばブラドリーはハムレットの逡巡とそれに関するデータを心理学より借用したメランコリーに関する仮説でもって説明している。更に彼は劇のもっている意味(ハムレットの悲劇)を解釈している。このとき彼は「善の悪との闘争における自己消耗」という世界における悲劇的事実から引き出してきた仮説をたてハムレットの悲劇を説明している。ブラドリーにとってハムレットと『ハムレット』の説明はハムレットのメランコリーと悲劇の解明なのである。即ちある(ブラドリーにとって)は真である)一般法則ないし仮説をハムレットの性格や闘争と

敗北に宛用することなのである。

アーネスト・ジョーンズも劇の意味、劇の中心、劇の正しい理解といったものに携わっている。彼にとっても亦ハムレットの逡巡が劇の中心であり、少なくとも彼にとってはこのことはイーディパル・コンプレックスでもって説明できるのである。更に彼はイーディパル・コンプレックスは人間の行動に関するともかく彼にとっては真なる一般仮説であるという大前提をたてているのである。

ナイトは自分では解釈 *interpretation* といっているが、ともかく『ハムレット』の説明 *explanation* に携わっている。彼の説明とは『ハムレット』の中心に関する大前提の構成とその確証のことである。彼の前提はシェイクスピアの詩劇は本質的にテーマ的（シンドローム的、空間的、隠喩的）であるというところである。この大前提より彼は『ハムレット』のテーマは生死、健康対病、善対悪であるという小前提を導き、そして『ハムレット』を説明しているのだ。

総ての歴史主義批評家達は（ロバートソン、ストール、シュキング、テオドル・スペンサー、ミス・キャンベル等は）エリザベス朝という時代に関する一般的かつ真なる諸仮説より

『ハムレット』に関する諸特称仮説を導出して『ハムレット』の正しい理解、真の読み方、真の意味ないし意義を提供しているといえよう。

更にエリオット、ファーマーガスン、ミス・スパージョン、クレイメン、ウィルソン等も総て説明に従事しているといえるのである。

以上の諸批評家の諸説明より『ハムレット』におけるデータの説明の論理的機能を一般化してみることにする。『ハムレット』批評における説明で直ちに気付くことは説明が価値評価 *evaluation* と相似している点である。即ち両者には理論の構成とその宛用とその確証とがあるのである。しかし説明は真の解明を、価値評価は真の評価を目的とする点で両者は異なっている。それにしても真の解明、真の評価とは一体可能なのであるか。後に論ずることにする。

さて諸批評家は『ハムレット』を説明するときには先ず劇中のいくつかのデータの真（偽）の記述を行う。次に彼らはそれらのデータに関して「何故それらはそのようなのか」、「どのようににそれらは相互に関連しているのか」をたずねるのである。これらの問題に解答する際に彼等はある仮説を提供するの

だが、この仮説は人間の本性、ある形而上学的事実（例えば世界における悲劇的事実）、歴史的事実、詩劇の特性等に関するもう一つの更に一般的な仮説から彼等が導出してきたものである。そしてこのより一般的な仮説（心理学的、形而上学的、歴史的、美学的諸仮説）は批評家自身によって人間の生、歴史、詩劇等の客観的事実に関する真の叙述として考えられているのである。このような一般仮説から『ハムレット』に関する特称仮説を導出する際に批評家は彼の説明を理論構成 *poetics* に、即ち説明の原則 *category of explanation* に結びつけるのである。そしてこの原則にのみ従って『ハムレット』は一番適切に（例えば心理学的に、形而上学的に、歴史的に、あるいは美学的に）説明されうるし又されるべきなのである。そしてこの接合点において批評と学派ないし主義とは結びつく。何故なら批評家は、生、歴史、詩劇等に関する一般仮説をたてる際に「如何にすれば我々は『ハムレット』のような芸術作品を最も適切に説明（理解、読むこと）が出来るのか」という質問に対する答をその仮説の中に意味することになるからである。即ち批評家は『ハムレット』を説明する際に「如何なる一般的な形而上学的、心理学的、歴史的、美学的仮説から『ハムレット』に関

する特称仮説を得るのか」という問題と「何が『ハムレット』を説明する最良の方法（心理学的、形而上学的、歴史的、美学的的方法…性格分析、悲劇の特性、思想的演劇史的事実、象話と祭儀、イメージャリ、テーマ、シンボリズム、有機的単一性等に関する方法）なのか」という問題とに対する答を暗に又は明白に意味しているのである。

説明とは「何故これらのデータはそうであるのか」、「どのようにこれらは関連しているのか」という問に答えることであった。しかし説明されるデータは既に所与のものではありえず、説明の為に最も重要なものとして選択された批評家本人がそのようにあつて欲しいデータなのである。即ちデータそのものが仮説化されているわけである。『ハムレット』における中心、第一者、最重要者、テーマとはデータではなく仮説なのである。そしてこの仮説を批評家は『ハムレット』に関する特称仮説から劇に関する一般仮説に至る諸仮説でもって論証していくのである。従つて説明のこの部分を複雑にしているものは、批評家が何故又はどのように事物が存在するかを説述する際に、彼が既に記述しうる現実のデータを記述しえない仮説的データと同定してしまっているということである。

批評家は一般仮説より『ハムレット』に関する特称仮説をたてたその後で、その特称仮説を『ハムレット』のいくつかの面又は全体に対して導入することによって確証を行うのである。

『ハムレット』の全体又は部分に対する批評家の説明（彼の説明の原則と特称的方法、彼の一般仮説と特称仮説、彼のデータ記述と彼の確証）は批評家自身によって真であり検証可能であり完全なものとして提供されている。即ち彼の説明は真の原理に基づき、『ハムレット』のいくつかの又は総てのデータに対する真の理由又は正しい原因を提供し、それらのデータを歪曲せずに網羅しているものとされているのである。そこで諸批評家は自分の説明こそが正であり真であることを要請しつつ論争を展開しているのである。かような論争は次の範囲に渡る。①『ハムレット』の説明の原則ないし方法に関する論争、②人間の本性、悲劇、類別された歴史的事実、演劇の特質に関する一般仮説における論争、③これらの原則や一般仮説の『ハムレット』への宛用が適切であるかどうかという論争、④『ハムレット』の全体又は部分に関する特称仮説における論争、⑤主要なものとして仮説化され最早所与のものではなくなったデータに関する論争、⑥所与のものにせよ仮説化されたものにせよ総て

のデータを仮説が無理なく網羅するかどうかという論争。こういった領域において説明に関する論争は行われうるのであり現に行われている。従って『ハムレット』に対する理想的説明とは次のようなものになるかもしれぬ。説明の方法ないし原則の叙述が真である説明。歴史、心理学、形而上学、演劇史等に関連した一般仮説が真であるかあるいは高度に蓋然性がある説明。『ハムレット』の部分又は総てに関連した特称仮説が確証可能である説明。そしてその確証が総ての関連しているデータを網羅するという点で完全な説明。以上のようになるかもしれない。それにしてもこのような理想とは実現可能であろうか。

先ず、悲劇や人間の本性に関する形而上学的叙述とか美学的叙述、演劇の特性に関する美学的叙述等は真として確定することとは困難である。しかもこういったものに関する真とされている叙述は、必ず後の批評家の真とされている叙述に反駁され否定されてきている。次に、説明の原則ないし特称的方法を真又は最良者として実証することも亦困難である。

即ち、心理学、形而上学、思想史、演劇史、象話と祭儀、イメジャリ、シンボリズム、詩、有機的単一性等が『ハムレット』にアプローチし説明する正しく最良のカテゴリーであると

の主張を確定できる論理的に自明なもの、あるいは経験的に又は形而上学的に真なるものは何もないのである。

更に、データに関する多くの叙述は真でも偽でもなくそれら自身が確証ないし論証を要求する仮説であるという困難も亦存在するのである。

結論としてこれらの困難が理想的説明を拒否する。「何が説明されるべきであり、どのようにそれが説明されるべきか」は『ハムレット』説明批評における絶え間のない論争の火種である。特称的なものにそのものが仮説であり、どのようにからあるいは説明原則からなすが(劇の中心物として)導出されてきた場合は殊さら論争は避けられなくなる。『ハムレット』の真で正しい最良の説明、読み方、解釈、理解といったものは存在しないのである。

このような理由で批評における説明とは劇の記述可能なデータのあるものをより充全 *adequate* にあるいはより充全でなく説明することではありえない。従って説明の良否の判定基準は真偽ではなく充全性又は非充全性である。

では説明の充全性に関する最小限度の基準を述べることにする。

①批評家の読者が批評家が如何なる視点から『ハムレット』を説明しているかを正確に知れるように、批評家が自分の採用した説明の方法ないし原則を明白に叙述し宛用しているかどうか。

②説明に適切であり経験的に証拠だてが可能であり、他の人々によって高度に蓋然性があると既に確証されているかあるいは批評家自身によって説明がなされるときに高度に蓋然性があると確証された、一般仮説を批評家が宛用しているかどうか。

③説明さるべきデータを無理なく網羅するような『ハムレット』に関する特称仮説を批評家が形成しているかどうか。

④(最も漠然とした基準ではあるが)批評家の説明全体に良質の一貫性があるかどうか。例えば説明の際に犯したデータ自体の歪曲は決定的欠陥である。

さてここで説明と解釈 *interpretation* とを論理的に分離する考え方に決着をつけることにする。C. L. スティーブンスンは一九五十年の『フィロソフィカル・アナリシス』の「美学における解釈と価値評価」C. L. Stevenson, "Interpretation and Evaluation in Aesthetics," in M. Black (ed.), *Philosophical*

Analysis (Ithaca, 1950), pp. 341—83. の中で次のようなことを主張している。解釈は説明と異なる。批評における解釈の役割を分析してみるなら、解釈は芸術作品の一つあるいはいくつかの面に関する説明としてではなく、それらの面に対して如何に対応すべきかということに関する決断あるいは推薦として論理的に機能していることが解る。解釈とは芸術作品に応答する為の決定に他ならない。解釈は批評家の読者を芸術作品に対して批評家自身が対応するのと同様に对应させるのである。このような作品に対する適切な応答の決定者としての批評的解釈とはどうしようもなく規制的でありかつ半強制的であって説明的では全くない。しかも決断、決定、推薦とは解釈の第一の役割である説明に付随し依存した第二次的役割でしかない。何故なら、批評家の解釈が劇の真又は充全な説明を意味するという想定にたつてのみ我々は批評家の推薦を受け入れるからである。

以上のように『ハムレット』批評における説明の論理的機能を説明してきたのであるが、結論として得たものを『ハムレット』批評における実際の諸問題に宛用してみることにする。

「ハムレットの中心とは何か」。この問題はハムレットの特徴についての特称仮説によってのみ解答しうる。この問題に對

する真の解答は決して存在しない。又完全な解答も存在しない。というのは如何なる仮説もハムレットの属性の総てを無理なく網羅することはないからである。いくつかの解答が他の解答よりもより充全なだけである。

「『ハムレット』の主人公は復讐悲劇の主人公として理想的であろうか」、「ハムレットの自己非難は裏返し of 自己奨励であり、従つて自己肯定であろうか」。ストールはこれらの問題を肯定し、ウィルスンは否定している。両者は自己奨励とか自己肯定とかが劇中のデータである、あるいはないという想定において間違つてゐる。ハムレットが自己を非難するさいに本当は自己を奨励（肯定）している（又はしていない）ということ、彼の自己非難というデータと他の（彼や劇の）データとの関連に関する仮説なのである。ハムレットについてのどの仮説が彼の自己非難を最も充全に網羅するかというストールとウィルスンの論争は説明の論争なのだ。ウィルスンにしてみればストールの仮説はハムレットの自己非難を彼や他の人々の心の病並びに彼の欲求不満と薄弱性に関連させていない点で間違つてゐるのである。ストールにしてみればウィルスンの反論と仮説はその心の病とかハムレットの欲求不満といった同一のデータ

を復讐悲劇の叙事詩的諸面に関連させていない点で誤っている。ストーリーにとっては、心の病というデータは「デンマークにおける何か間違ったもの」というデータと共に陰謀の一部をなしているものであり、ハムレットの欲求不満というデータはこの陰謀が与える作用の一部なのだ。こういったわけで彼等の論争は大仮説と説明とに関したものであってハムレットの薄弱性がデータであるのかないのかに関係しないのである。更にいうなら「自己奨励」、「自己肯定」、「薄弱性」といった語は彼等の論争においては記述ではなく説明として機能しているのである。従って「ハムレットの自己非難は裏返し自己奨励であり、従って自己肯定であろうか」という問題には真(肯定)又は偽(否定)で答えられないのである。

この問題は、「『ハムレット』と主人公に関するストーリーの仮説は充満であろうか」、「それは明晰でありかつ確証された歴史的仮説の上に築かれているか」、「それは総てのデータを無理なく網羅しているだろうか」、「『ハムレット』が復讐悲劇の典型であると主張することは何かを見落しているという感じを我々に与えないであろうか」といったより大きな説明的諸問題の一部分として論理的に機能しているのである。

「何故ハムレットは逡巡するのか」、「何故彼はオフィーリアをあんな風に扱うのか」、「何故彼は風変りを装うのか」。これらの問題に対しては真偽の答は与えられない。答はより充満であるか、より充満でない仮説でしかありえない。そしてこれらの仮説はハムレットと彼の役割に関するより大きな仮説の一部分として提供されねばならないのである。「何故彼は逡巡するのか」という問題と関係のある「彼は自己正当化をしているのか」それとも「彼は自己を欺いているのか」という二つの問題は、祈りの場面で彼が王の命を奪わなかったというデータと彼の亡霊に対する疑いというデータとを特に説明しようとする二種類の仮説のうちどちらがより充満かを問うている。ハムレットが自己を正当化しているということは所与のデータについての真(偽)の記述ではないのである。批評家がこの種の問題(ハムレットが自己を正当化しているかそれとも自己を欺いているか)を、劇中にどちらかに決定する為のデータが存在するかの様に論じてみても全く意味がないのである。

「ハムレットは激情の奴隷であろうか、過度の知性の犠牲者であろうか、スケイプ・ゴートであろうか、バロック風の主人公であろうか……」。これらも亦説明の充満性を問う問題であ

る。

シェイクスピアの『ハムレット』の真のテキスト、写本の移動、『ハムレット』の種々のテキストの間の正確な関係、キッドの手になる二重劇の改作としてのシェイクスピアの『ハムレット』といった諸問題は所与の証拠に関する仮説とその確証という点で明白に説明の諸問題である。

ナイトの「ハムレットは死のシンボルであろうか」という問題も亦説明的である。

ウィルソンの「ハムレットの神秘には芯があるのであるであろうか」という問題は「ハムレットの諸特質のうちでどれか一つでも主要なものはあるであろうか」という問題と「一つの仮説が彼の総ての特質を網羅できるであろうか」という問題との比喩的な表現であると考えられる。ウィルソンはハムレットの神秘に芯がないとして否定している。この解答は高次説明的問題 meta-explanatory question に対する高次説明的解答 meta-explanatory answer であって、単に説明的問題に対するいくつかの競合的な諸解答の一つではない。何故なら「ハムレットの神秘には芯があるであろうか」という問題は「何がハムレットの主要な特質か」という問題と「どの仮説が彼の総ての特質

を網羅するのか」という問題とに如何なる種類の解答が与えられるか」という問題に等しいからである。ウィルソンの否定はハムレットの真なる説明は与えることが出来ないということの意味している。この高次説明的解答を単なる説明的解答の一つと同定してはならない。ウィルソンの否定的解答はハムレットについてのもう一つの説明でもって否定できないのである。

彼の解答は真の説明が与えられることを証明することによってのみ否定しうるのである。ウィルソンにとっては、ハムレットに中心がないと主張したり、ハムレットは単一化された性格を持たない（彼の全体の諸特質が一つの心理学的タイプに組み込めない）と主張したりすることは、ハムレットが理解出来ないとか、自分の解答がハムレットについての説明の一つであるとかを主張しているのではないのだ。現代の形式論理学ではウィルソンの比喩的な問題と解答のことを、ハムレットの中心的特質と性格の単一性についての第一順位の問題と解答に関する第二順位の問題と解答と呼んでいる。

「劇芸術作品としての『ハムレット』をどのようにすれば一番よく理解できるか」。この問題とその解答とは価値評価的 evaluative 問題と理論構成的 poetic 問題と説明的問題とを含

んでいる。即ち「一番良く」と「劇」と「理解」との意味についての問題である。ここで問題とされるべきものは「理解」である。理解とは説明に他ならず「『ハムレット』の一番良い理解」が何を意味するにせよ「『ハムレット』の真の説明」とは同定できないのである。

(つづく)